Letters
Arpak
レターズ アルパック
VOL.224 ISSN 2432-5295

あそび

CONTENTS

◆【あそび】…01〜04
・“やきもののまち„であそぶ ・鉄道と都市のあそびを考える ・あそびを演出する地域づくり ・身近な外遊び ・人と、まちと関わりながら遊ぶということ ・遊びが苦手な私 ・あそびながら仕事する
◆今、こんな仕事しています…05〜08
◆新人紹介…08
◆事務所だより…09
◆近況&イベントのお知らせ…09〜10
◆まちかど…裏表紙
・「たんば」で暮らし・働く

あそび

ガチガチに固められた「あそび」のないまちや人は何かと退屈でしょう。私たちが目指すのは持続可能な地域づくりへの貢献ですが、人を退屈させない魅力（≒あそび）のあるまちこそが持続可能ではないでしょうか。

「あそび」は余裕でもあります。先が読みにくい昨今の社会にあっては「あそび」のあるプランニングが求められます。あそび半分に業務をこなすようでは困りますが、やはり私たちはあそび心のあるプランナーによるあそび心のあるまちづくりを目指したいと思っています。

アルパックには真面目な人が多いと思われているかもしれません。実際にそういう面もあるかもしれませんが、打ち合わせの際にアルパックの担当者からウィットを効かせたユーモアの一つも出てこないときには遠慮なくお申し付けください。

レターズアルパック編集委員会

〝やきもののまち〟であそぶ

新開夏織：建築プランニング・デザイングループ

一日の寒暖差が感じられるようになった今日この頃、ふと陶芸をしたい気持ちに駆られ、愛知県瀬戸市の窯元さんを訪ねました。

瀬戸市は陶磁器の通称〝セトモノ〟の語源になっているまちで、日本六古窯の一つです。

私が陶芸体験（電動ろくろ）をしたのはこれで3回目。今回は職人さんにも手助けをいただきながら、丼ぶり鉢を作りました。まだまだ初心者の身ですが、陶芸の面白さは、作りたいかたちを想像しながら込めた力がダイレクトに形に現れることだと感じています。そして思った形になかなかならず、土の感触を確かめながら何度も応答を繰り返すことに陶芸の奥深さを感じます。

今回作った丼ぶり鉢

また、瀬戸焼の特徴の一つに、瀬戸で採れる土は白く、釉薬をかけずに焼いた部分は使っているうちに黒くなっていくことがあるそうです。一つの作品がともに成長していくところにもまた趣を感じます。

さて、私はこれまでにやきもののまちには4か所ほどあそびに行きました。岐阜の土岐、愛知の常滑、佐賀の伊万里、そして瀬戸です。やきもののまちの楽しみの一つに、町並みやギャラリーを見て歩くことがあります。土岐では幾つかの窯元さんを見学して多種多様な作品に出会い、常滑では土管や焼酎瓶、電纜管が様々な使われ方をして町並みの一部になっている場面に出会い、伊万里では「ここから見る景色が私の原風景」と、登り窯を登って見る景色を教えてくれる人に出会い、瀬戸ではそのまちの風土によって異なる陶器の世界の一部に出会いました。

個性豊かな作品が並ぶ（伊万里にて）

このようにやきもののまちを訪れることで新たな世界観に出会い、たくさんの刺激を受けます。普段何気なく使っている器ですが、その裏には色々な物語があることを知ると、いつもの生活も少し楽しくなるような気がします。

鉄道と都市のあそびを考える

石川聡史：都市・地域プランニンググループ

かつて兵庫県尼崎市に尼崎港線と呼ばれる旧国鉄福知山線の支線がありました。塚口駅から廃駅になった尼崎港駅までを結ぶ4.6キロメートルの短い路線です。

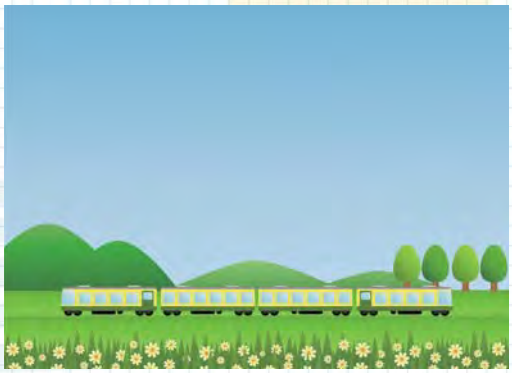
1981年の旅客運行を終える直前には1日2往復しか運行しておらず、すでに旅客輸送の役割は終えていました。都市部の路線にもかかわらずローカル線の雰囲気を感じることができたため、私のような鉄道ファンにとっては面白い存在でした。

尼崎港線に限らず、民営化以前の国鉄には日本全国にこのような乗客が少ないローカル線がたくさんありました。鉄道にも余裕という意味でのあそびがまだ残っており、それを鉄道ファンが乗りに行っては楽しませてもらっていたわけです。

その後、国鉄は民営化され赤字ローカル線が切り捨てられていきましたが、最近ではクルーズトレインをはじめとする観光列車が各地で増えてきました。移動の手段として利用されてきた鉄道ですが、観光ニーズが多様化する中で、移動だけでなく積極的に楽しむための機能を盛り込むことで、新たな使い方が見いだされた例と言えます。

移動の手段としての素の鉄道を楽しんでいた私にとっては少し複雑な心境ですが、あそびがなくなってきたと思っていた鉄道に、違う形でもあそびが復活してきたことは喜ぶべきことかもしれません。

都市も拡大、過密が進み、空間的なあそびは少なくなりましたが、今後、人口減少に伴って縮小に向かい、またあそびが増えてくることが予想されています。都市計画のプランナーとしては「何か活用しなければ、埋めなければ」と考えてしまいますが、少し力を抜いて新たなニーズが出てくるまで待つというのも一つの方法ではないかと思っています。



あそびを演出する地域づくり

小川直史：地域再生デザイングループ

「あそび」とは何か、考え始めるととても難しいです。仮に、なんとなく「暇」な状態を豊かに体験化したものが「あそび」だとすると、「あそび」と都市には様々な関わりがある気がします。

外での打合せが早く終わった勤め人が、近所の喫茶店で次の予定まで時間をつぶす。学校や部活が早く終わった高校生は、駅で電車が来るのを待つ。このシーンには、本当は何かしたいけど何もないという、退屈が強いられている状態から、ぼうっと心地よい暇な時間を過ごしているという状態のグラデーションが存在します。

魅力ある都市とは、ぼうっと心地よい暇な時間を過ごせると同時に、退屈が強いられることが少ない、というのがひとつの要素ではないかと思います。センシュアス・シティ（官能都市）が標榜する概念に近い感覚です。地域づくりに携わる身として、「あそび」を演出するような視点を持っていたいなと思います。なかでも、自宅から駅までの道や、次の予定までのちょっとした時間などの、「間」での演出が効果的なのではないかと考えています。

今、機能の検討を進める滋賀営業所もそういう「間」の場所にあります。空間的には駅と商店街の「間」にある新地地区。そして、近くには学校や市役所などがあり夕方には駅への往来が増え、時間的には家に帰るまでの「間」であるとも言えます。ですので、移動の間に寄り道したくなるような仕掛けを、滋賀営業所で提案できればと思っています。

そんな思いから、最近、ちいさな実験をはじめています。有志のメンバーで、滋賀営業所が入っている町家で「ビールづくり」をしています。とはいえ、酒税法があるのでアルコール度数は1％未満で、販売も出来ません。ゆくゆくは、早く仕事が終わった人が軽く一杯ビールを、旅行者が「クラフトビールがあるらしいよ」と「間」にある営業所に立ち寄れると、人の動線が変わり、地域の魅力を増していけるのではないか。そんなことを考えながら、そして東近江市にある政所茶や木地製品などとのコラボレーションも企みながら、「あそんで」います。

ピール醸造キット

身近な外遊び

小阪昌裕：公共マネジメントグループ

with コロナ・after コロナ時代は、生き物の「密度」がキーワードの一つのように考えられます。人間の暮らしの密度として、都市化が進んだ自分の原風景を振り返ってみました。

まず、保育園に通う道中、稲荷神社境内の池の端で甲羅干しをして動かないカメを眺めるのが日課でした。小学校時代は、裏参道には筆で蛇に似せて名前を目の前で書いてみせたり、夏にはヤドカリを洗面器に入れて売っている露店等も数多く出ており、下校時にはそれらの店主と話をしてよく道草を喰いました。また、冬には山の頂上まで1周する校内マラソンが毎年あり、そのルート上には昨今有名となった千本鳥居もあります。

家から見える地肌の斜面に、白っぽい土でできた小山を塩山、赤っぽい方はラクダ山と名付けて、ダンボールを敷いて滑り降りが楽しみでした。近所の空き地では、数人の友達を集めてのタイベン（3角ベース）、民家の2階ぐらいの高さを通る鉄道敷きの土手斜面がバックネット代わりになり、夕焼け空をバックに蒸気機関車が煙を吐いて加速する雄姿をみながらボールを追いかけていました。

最も身近な遊び場は、道路でした。アスファルトになる前は砂利道で、砂ぼこりもたっていました。我が国に歩道がないのは、道路すべてが歩道だったからと聞きましたが、キャッチボールや縄跳び、道路で嬉々と遊べた時期が懐かしく、車がまちの隅々まで入れるようになった昨今、便利な反面、何か窮屈な気がします。

今では、池は食事処、参道も食べ物店が主となり、山の斜面は駐車場、空き地は宅地として整備され、いい加減な空きがなくなり空間的に密になっていることを改めて実感しました。新しい生活様式として身近な環境で外遊びができる「（人、空、時）間」も必要かもしれません。

人と、まちと関わりながら遊ぶということ

江藤慎介：地域産業イノベーショングループ

昨年末から新型コロナウイルス感染症が世界中に拡大し、現代も第二波、第三波が押し寄せる中、子どもたちもまた、多大な影響を受けています。普段からマスクを着用することはもはや当然となり、お友達と対面で話すことや手をつなぐこともできず、大声で歌えず、遊具でも遊べない、外で遊べない。そんな毎日を、皆さんのまわりの子どもたちはどのように過ごされているでしょうか。

私は卒業論文を書いたことが縁で、子どもたちと遊ぶ活動に関わるようになり、現在はNPO法人アフタフ・バーバン関西の理事を務めています。忍者に扮して子どもたちと様々な修行（という遊び）に取り組むことで、イメージの世界で自らの想像力を活かし、子どもと、大人と、まちと関わる活動をしています。そんな私たちの活動も、コロナ禍で中止が相次ぎました。会議をオンラインで開催しながら、子どもたちとの遊びもオンラインに切り替えたほうが良いのかと悩みましたが、私たちは今年度、活動数が少なくなっても直接会って遊ぶことを選びました。オンラインでも遊べるけれど、やっぱり会いたい。ソーシャル・ディスタンスでも、会って遊ぶことで色々な想いを伝えたい。楽しい気持ちを目の前で共有したい。

そこで、コロナ禍でも子ども同士で、親子で、屋外で楽しめる遊びを集めた『アフタフ・バーバンwithコロナあそびのススメ』をこのたび発行しました。機会があれば手に取っていただき、目の前の子どもたちと心から遊んでもらえれば幸いです。

遊びが苦手な私

豊福宏光：サスティナビリティマネジメントグループ

今回「あそび」をテーマに原稿依頼を頂いた際に、瞬時に思ったことは、とにかく苦手という感覚でした。それは、私自身非常に頭が固く「あそぶ」ことが苦手なタイプだからです。高校時代、美術大学を受ける為に画塾（美大受験予備校）に通っていた際、白いキャンバスに自由になんでも描いてよいという課題が出て、頭が真っ白になってしまい、何も思いつかなく苦労した思い出があります。模写やテーマが与えられれば、そこから色々な書き方や構図、アイデアが出てくるのですが、私にとって自由に描くことが恐怖でたまりませんでした。その後は、自分なりに考え、例えば白いキャンバスに1本の線を自分で描きそこから自由に描いていくことや、とにかく思いついた言葉から連想し最終的に作品化したり、また他の技法（写真やパソコンソフトでの編集）を選択し、高校、大学を過ごしていました。

今の仕事では様々なアイデアが求められる局面も多く、私は相変わらず頭が固いのですが、学生時代の工夫を活かし、色んな分野を率先して体験し、それらを組み合わせていくことで少しはあそびのあるアイデアが生まれると感じています。考えが偏らないように、過去から未来の時間軸と、自分のあまり知らないジャンルを横断することも意識的に行っています。

最後に、私にとって苦手意識が強い「あそび」ですが、この執筆を機会に私なりに「あそび」について考えてみたところ、「あそび」は「没頭する」ことかなと思いました。思い返せば、子どものころは時間を忘れて友人とのスポーツやゲーム、また一人でもおもちゃのブロックづくりや川での魚捕りなどに夢中になっていました。ですので、大人になった今だからこそ、改めて意識的に「あそび」＝「没頭する」時間をつくっていきたいと思います。映画や読書などもそうですが、最近では、新しい街に行った際に古い建物や看板などを見て魅了されたり、美味しいものを口にしたりする時はその時間に没頭しています。歳を重ねても「没頭する」大切さを忘れずに生きていきたいと思いました。

あそびながら仕事する

坂井信行：都市・地域プランニンググループ

「あそびながら仕事する」というと不謹慎と思われるかもしれませんが、あそびと仕事の区別は難しいですし、あそびの対義語が仕事というわけでもありません。あそびの定義を見てみると、①実利を目的としない、②自分の心を満足させる、③それ自体が目的になる、と概ね3つぐらいの要件がありそうです。仕事との関係を考えるとワークライフバランスやワークアズライフという言葉も連想されます。

さて、私の日常（ライフ）を振り返ってみると、旅行や写真の撮影、鑑賞は私の心を満足させることの一つで、それ自体が目的でもあります。旅行に出かけると、まちなかを歩き回って探検したりいわゆるトマソン探したり、その際に街角の風景やスナップを大量に撮影するのが好きです。重たい一眼レフを持っていくこともありますが、森山大道にあこがれて買ったGRというコンパクトカメラの登場機会も増えました（普段からカバンの中にも入れています）。最近は簡単に360度撮影できるTHETAという小型カメラも導入しました。ただ、今は（海外）旅行に行けないのが残念です。

ところで、私は同じ業界の人には共感いただけると思うクセがあります。それは写真を撮るときにいつか使える場面があるかもしれない、と頭の中でキャプションを考えてしまいがちなことです。仕事（ワーク）から離れられず、結果としては実利も目的になってしまう、一種の職業病です。ワークアズライフと開き直るのもいいのですが、「あそびながら仕事する」という方がポジティブな感じがしませんか。あそびはライフの中だけではなくワークの中にもあるのだ、と。

ここまで書いて気付いたのですが、あそびの3つの要件のうち、①を実利につながることもある、と変えるとそれは趣味になります。私にとっての旅行と写真はあそびではなく趣味なのかもしれません。素直に考えれば納得なのですが、やはり「あそびながら仕事する」というのはないのでしょうか…。紙幅が尽きました。いつか「仕事」がテーマになったときに改めて考えてみたいと思います。

今、こんな仕事をしています

杉原千畝顕彰施設「センポ・スギハラ・メモリアル」

間瀬高歩：
建築プランニング・デザイングループ

杉原千畝氏は、名古屋市の古渡尋常小学校（現・名古屋市立平和小学校）と第五中学校（現・愛知県立瑞陵高等学校）で約10年間学び、早稲田大学高等師範部を経てハルピン学院を卒業し、1924年外務省に入省されました。

その後、リトアニア国在カウナス日本領事館の領事代理であった1940年にはユダヤ人難民のために日本通過ビザを大量発給することで、約6000人の命を救ったとされています。

2016年度、当社では瑞陵高等学校を対象地として、杉原氏の人道的な立場を貫いた足跡を広く伝え、後世に引き継いでいくためにふさわしい顕彰施設整備の調査計画を担当しました。杉原氏にまつわる既存の史料等の有効活用を図り、瑞陵高等学校ならではの立地特性を活かすことを重視し、正門の隣に誰でも自由に見学できる屋外型の顕彰施設（475平方メートル）を計画しました。

2018年10月に竣工した顕彰施設は3つのテーマを基に展示しています。1つ目の「人道的な功績をたたえる象徴的なモニュメントの設置」では、リトアニア・カウナスの領事館でユダヤ人難民にビザを発給する杉原氏の姿を実物大のブロンズ像で再現し、ビザ発給リストに残る2256人全員の氏名を陶板に刻んでいます。2つ目の「外交官としての仕事とその意志を受け継いだ人々」では、ビザ発給を巡る外務省とのやり取りを記録した公電等を展示しています。3つ目の「学生時代に関する資料」は、16歳当時の杉原氏が収まった集合写真や在学当時の作文等を展示しています。

「人道主義による決断」の展示パネル

杉原氏は、第二次世界大戦という激動の時代に、自らの職を賭して、信念を貫き、一人でも多くの人間の命を救うという行動に出ました。このような杉原氏の行動の中に、人間の可能性、人間の力というものを見ることができるのではないでしょうか。

西粟倉村で誰一人取り残さない未来を考えるワークショップを開催しました。

中川貴美子：
サスティナビリティマネジメントグループ

SDGsを地域でどう取り組んでいくのか。持続可能な村の未来を考える場として、SDGsをテーマに、勉強会を開催しました。

現在、岡山県西粟倉村で第6次西粟倉村総合振興計画の策定をお手伝いしています。総合振興計画では、村民が自らの言葉で自分事として村のビジョンや未来像を語れることを目指して、ワークショップ等の取り組みを進めています。西粟倉村は、令和元年7月に「SDGs未来都市」に選定、西粟倉村SDGs未来都市計画を策定されており、これらの取組も推進していくため村民対象の勉強会をしました。

第2回カードゲーム実施の様子

この勉強会では、SDGsの原則である、「誰一人取り残さない」ということと「統合的に解決する」という2つを重点テーマに据えて実施しました。

1回目は、当社畑中より、SDGsのポイントと地域の環境・経済・社会について、地域の成り立ちと地域循環等にクリチバ市（ブラジル）の事例にも触れながら講義を行いました。2回目は金沢工業大学考案のカードゲームを活用し、「トレードオフ＝一得一失↓取り残されそうな課題↓リソースカード（資源）を活用すること↓統合的に課題解決する」という流れを体感いただきました。最後は、西粟倉村の暮らしの中で「トレードオフ」が生じていることを西粟倉村版トレードオフカード（保育園ができて、女性が働きやすくなったが、時間に余裕のある人が少なくなってボランティアが増えなくなったなど）として作成し、グループで解決アイデアを話し合いました。地域の暮らしや事業の中で取り残されそうな課題はないか、トレードオフは存在していないか、その洗い出しが身近に考えるポイントなのではないかと感じています。

※この業務は、畑中、豊福、佐藤、植松も担当しています。

まちの活性化に資する事業の実現
～岩国駅東口元町地区優良建築物等整備事業～

西村創：
地域再生デザイングループ

まちににぎわいをとり戻したい。その思いから平成22年にまちづくり会社『株式会社　いきいき東』が設立されてから10年を経過し、山口県岩国市の岩国駅東口元町地区優良建築物等整備事業の工事がいよいよ着工の運びとなりました。

関西を拠点としている弊社が様々なご縁でお手伝いを始めたのは、およそ5年前でした。当初は、駅前でありながら、低未利用であった駅東地区で商業、業務、公共公益機能の複合ビルを開発事業により建設し、地域ににぎわいをとり戻し、活性化につなげることを検討していました。

岩国駅東のイメージパース
（左の建物が本事業、右が 2017 年に完成した JR 岩国駅）

事業手法としては、様々な経過により、優良建築物等整備事業を選択することとし、1階には、市の施設、上層階については、まちなか居住を実現するマンションとすることとなりました。

今回の事業では、施行者を優良建築物等整備事業において一般的である住宅の販売を行う事業者ではなく、まちづくり会社としながら、完成後の住宅を売却する先として、株式会社エストラストを事業協力者として選定し、協力を得ながら事業を進めています。権利者の皆さんとの交渉については、まちづくり会社の皆さんが地域をよくしたいという思いを直接お話ししながら、ご理解をいただき、事業の実施に至ることができました。

現在では、ＪＲ岩国駅の橋上化、駅前交通広場の整備、小中一貫校の整備などが完成しています。駅の東側エリアに本事業の建築物も加わり、更なる地域の活性化につながるよう事業の完了までしっかりお手伝いができればと思います。

関西におけるオープンファクトリーの今
～「地域社会」×「地域企業」×「外部リソース」が織りなすイノベーションフィールド～

山部健介：
地域産業イノベーショングループ

地域産業イノベーショングループでは、今年度、関西におけるオープンファクトリーの発展可能性に係る調査事業を受託しています。

オープンファクトリー（Open Factory）とは、読んで字のごとく、Open（＝開く）×Factory（＝工場）の造語であり、一般的にイメージしやすいのは「工場見学」という言葉かもしれません。広義には、工場などの製造業だけでなく、工芸品なども含めて、「モノづくりの現場を外部へ開く」という意味合いになります。毎年、定期的に開催される工芸祭や工場見学ツアーをイメージしてもらえると、分かりよいかもしれません。

オープンファクトリーの醍醐味は、普段は目にすることができない、モノづくりの現場や職人たちの熱量とマインドに触れることができることです。地域住民にとっては、自らのまちの魅力を再認識する契機となります。参加企業にとっても、地域社会と新しい接点を持つことで、地域企業としての意識の芽生えやイノベーティブな着想を得る機会にもなります。また、近年は大企業によるオープンファクトリーへの協賛だけでなく、地域企業とのコラボ商品の開発なども進んでいます。

［関西のオープンファクトリーの例（Design Week Kyoto）］
出典：Design Week Kyoto ホームページ

「モノづくりの現場を外部へ開く」というのがオープンファクトリーの始まりですが、今や現場を開く（見せる）だけでなく、様々な関係者が集い・交流する「場」へと変化してきています。「地域社会」×「地域企業」×「外部リソース（大企業等）」の3者がオープンファクトリーという場所で、空間で、出会い・交流することで、新たなイノベーションを生む土壌にもなりつつあります。関西の新たな魅力を国内外に発信するタネとして、今後、大きく成長していくことと思います。

権利擁護のアラカルト

廣部出：
公共マネジメントグループ

「烙印」を押し、「慈善や恩恵・庇護」の対象を作り出してきた制度が、時間をかけて「誰一人取り残さない」ための、当たり前な権利を保障する社会の仕組みに置き換わっていく様子を少々。

成年後見制度は、認知症、知的障がい、精神障がいなどによって判断能力が十分ではない人の権利を擁護する制度です。介護保険制度が始まった時に、判断能力が不十分であっても介護サービス利用に必要な「契約」手続きなどができるよう導入されました。元となった旧禁治産・準禁治産制度が差別的・面倒・高いで利用されなかったのを見直した制度なのですが、現制度も利用が低調で、国は潜在ニーズの一段の増大を見越して利用促進を図っています。

私どもも係る計画の策定をお手伝いしていますが、「権利を制限する」制度の利用促進には、社会全体で権利擁護についての理解がもっと浸透することが重要です。例えば、競馬が大好きな人に、単に帳簿を見て浪費を禁じるだけの財産管理をするなら、それはまさしく旧制度的で、その人の生活の質は低下します。

さて別な話ですが、「ひとり親家庭等自立促進計画」と「子どもの貧困対策計画」の策定もお手伝いしています。非常にざっくり言えば、前者は、戦後の寡婦対策から発したもので、生活のしづらさを強化する要因を複合的に備えていることが多い「ひとり親家庭等」の自立促進のための計画です。後者は、いずれはそれを置き換えるのだと思うのですが、子どもの生きる権利・育つ権利・守られる権利・参加する権利の保障に係る計画で、子どもが生まれ育った環境に左右されることなく夢を描いて成長できる社会を希求し対策する計画です。

最後に、この記事にはユニバーサルデザインフォントを使ってもらいました。様々な環境で高い視認性と可読性が保たれるよう開発され、用いられることが増えてきています。情報保障という権利擁護の一策でもあります。

まちの本陣プロジェクトがスタートしました！

嶋崎雅嘉：
地域再生デザイングループ

京都市には歴史的な建造物が多数ありますが、江戸時代の参勤交代で大名が宿泊した「本陣」の遺構は一つしか残存していません。

京都市内で唯一残る本陣遺構である「樫原本陣（京都市指定文化財）」が「まちの本陣」として再生されようとしています。

222号記事で既報の「誘導型まちづくりプランニング支援事業」を活用して、住民の方々がどのようにこの本陣を利用できるのか、ワークショップで意見を集めつつ、今年度中に活用方法と改修設計の内容をまとめる予定です。

これまでも、樫原本陣では、座敷を活用した源氏物語の朗読劇や土間でのライブ、まちづくりワークショップ、交流会などで活用されてきていましたが、より地域住民の方々が使い、集い、楽しめる場所にできないかと考えています。

ワークショップは、樫原本陣が面する旧山陰街道沿いの町並みを次世代に引き継ぐための活動をしている樫原町家灯篭会が主体となっており、アルパックも支援しています（執筆者個人としては灯篭会のメンバーでもあります）。

10月に開催したワークショップでは、「食・料理に関する活動」「発表の場」「本・読書の場」「子どもの育ちや学びに関する場」などとするアイデアや考え方が語り合われました。

これらの意見を踏まえ、「本陣」が「まちの本陣」としてどのようなコンセプトで生まれ変わることになるのか、今後も皆様に報告していきたいと思います。

樫原町家灯篭会 Facebook
https://www.facebook.com/katagiharamatiyatouroukai

誘導型まちづくりプランニング支援事業
https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000271876.html

樫原本陣
https://www.city.kyoto.lg.jp/nisikyo/cmsfiles/contents/0000044/44354/16-5katagihara.pdf

たかつきアート博覧会は今年で２０周年を迎えます

長谷川育世：
都市・地域プランニンググループ

たかつきアート博覧会の実行委員会では、来年度以降のビジョン作成に取り組んでいます。

高槻市では5月に「ジャズストリート」8月には「高槻まつり11月には「たかつきアート博覧会」や「はにコット」など多くの市民参加型のイベントが開催されます。その中でも「たかつきアート博覧会」は子どもから大人、お年寄りまで誰でも身近に関わることのできる「アート」を切り口として様々な企画やイベントを開催し、今年度で20周年を迎えます。残念ながら記念すべき20周年目は、新型コロナウイルスの影響もあり、規模を縮小しての開催となりましたが、メインとなるセンター街では、開催当初から続く巨大絵画の展示などが開催されます。

当初はセンター街での巨大絵画展から始まり、19年間の継続の中で、アートを切り口として様々な対象や企画へと展開してきたのですが、ボランティアでの運営継続の難しさなどの課題も見えてきたことから、21年目や今後のたかつきアート博覧会のあり方について、毎月の会議の中で議論を進めています。議論を進めていく中で、実行委員のみなさんのお話を聞いていくと、個々の思いは様々ですが、「高槻が好き」「アートを通じて子どもやアーティストが成長してほしい」「高槻の魅力をもっといろいろな人に知ってほしい」という大きな思いは一致しているように感じました。これらの意見をもとに、たかつきアート博覧会の全体テーマを設定し、そのテーマに沿った形で開催方法を含めた今後のあり方について検討していきます。

センター街に巨大絵画が飾られている様子（今年度）

実行委員会の様子

新人紹介

公民連携の可能性を探して

石川俊博
公共マネジメントグループ

はじめまして。10月から公共マネジメントグループ（大阪事務所）に配属となりました、石川俊博です。

京都で学生時代を過ごした後、自治体職員となり、東京と関西の基礎自治体での勤務経験が、それぞれ5年近くあります。業務として関わった分野は、文化振興、福祉、環境、防災、広報、計画など若干散らかっているかもしれません。

日々の業務の中で、公民連携で面白いことが出来そうだと思いつつ、どうしてもお互いの距離や認識のずれを感じることが時折ありました。これを減らす一つの解決策として、連携する民側にも公側の動きを理解している人がいれば良いと思うのですが、日本には市区町村が１７００以上ありながら、職員が外に出ていく事例が多くはありません。それならば、自分が両者のより良い関係性に貢献できる可能性があるのではないかと思い、自治体と連携する仕事が多いアルパックの一員として合流させていただくことになりました。

私が都市やまちの面白さに惹かれ始めたのは、大学生の終わり頃だったと記憶しています。学部での専攻は文学で、社名のような地域計画や建築といった要素には少し縁遠い分野です。しかし、詩人、小説家、ジャーナリスト、音楽家、画家、写真家等々の作品に触れながら、彼ら・彼女らの人生を追っていると、その才能を見出したのは、都市やまちであり、人と場が織りなす出会いに不思議な魅力を感じたことを、今でも懐かしく思い出します。きっかけは文化芸術寄りだったかもしれませんが、分野に限らず、そのような場を作るお手伝いができればと思っています。

今後とも、よろしくお願いいたします。

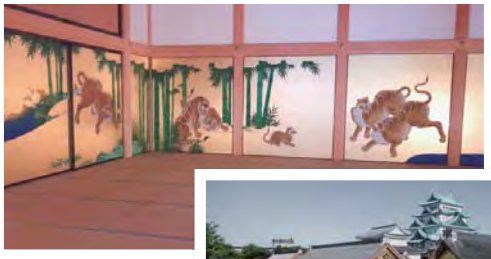
事務所だより

名古屋

「ちょっと前ですが、紹介したい。匠の技」

地域再生デザイングループ　木下博貴

名古屋事務所は、2019 年 1 月に伏見から名古屋駅の南、徒歩 5 分程度の場所に引っ越ししました。ちょうどその頃、名古屋を代表する観光スポット、名古屋城の城郭内に 10 年にわたって復元工事を進めてきた『名古屋城本丸御殿』が完成しました。名古屋城本丸御殿は、尾張藩主の住まいや政庁として建てられた後、将軍専用の宿泊所として用いられた建物でしたが、天守閣と同じく戦争で焼失してしまいました。復元にかかる総工費は、個人寄付を含めた約 130 億円となっていますが、材料となる木材をはじめ、全国から様々な職人が集い、実測図や多数の写真、礎石などを基に、他では類を見ない正確さで忠実に復元されました。名古屋にお越しの際には、是非、匠の技が結集された名古屋城本丸御殿をご覧いただきたいです。



九　州

「最近の天神・水辺空間の活用」

九州事務所　佐伯明日香

九州事務所は、中洲中島町という住所のとおり、那珂川と博多川に挟まれた中州にあります。

目の前を流れる那珂川では、リバークルーズが運航されています。船上では時折、生歌のライブが行われており、所長である山田のカラオケの十八番、玉置浩二さんの「メロディー」がよく歌われています。仕事中は正直うるさいですが、福岡市の観光の為に我慢我慢。

天神中央公園内にある船の乗り場近くには、昨年、西日本鉄道 (株) が手がけたハレノガーデンという 2 棟の建物ができ、東側には 3 軒のカフェや飲食店が入り、西側には「stock」という福岡で超有名なパン屋「パンストック」の 2 号店があります。

リバークルーズでは、GOTO トラベルの地域共通クーポン券が使えるので、福岡に遊びに来られた際には是非お楽しみください。

全社研修会を開催しました ～自分事としての中期ビジョン～

和田裕介
全社研修会実行委員

さる 10 月 24 日全社研修会を開催しました。例年は、京都、大阪、名古屋、東京、九州から所員が一堂に集まっていましたが、今年は、コロナ禍ということもあり、オンラインでの開催ということになりました。

全社研修会のテーマは「自分事としての中期ビジョン」です。

午前は、民間から副市長公募プロジェクトを通じて、2017 年から四條畷市副市長に就任された林有理氏から「民間出身ママ副市長が奮闘する事業・組織・人づくり」のタイトルでご講演をいただき、その後、意見交換を行いました。午後からは「アルパックの次の 10 年で私はどう行動するか」というお題で、オンラインワークショップに取り組みました。

アルパックの中期ビジョンは、所員が参加型で作成することで、所員一人一人が自分事としてとらえ行動につなげていくことを重視しています。全社研修会を通じて、一人一人の「自分事」に少し近づいたものと思われます。

近況 &イベントのお知らせ

CITÉ さろんで「アフターコロナのまちづくり」を考えています

羽田拓也
地域再生デザイングループ

CITÉ さろんでは大阪の都市づくりを考える機会として、設定したテーマの専門家などを講師にお招きする「トークセッション」を開催しています。

今年はコロナ禍ということで、開催形式を会員企業の会議室などでのフェイス・トゥ・フェイスでのディスカッションを交えた形式からオンラインへと変更して開催しています。テーマも「アフターコロナの大阪が目指すべきもの」として、「3 密」の回避やテレワーク、時差出勤の導入など、コロナウイルス感染症拡大防止対策などを受け、大阪におけるこれからの都市としてのあり方、都市づくりの方向性について考える機会として進めています。

第 1 回は、オンラインの特性も生かし、「これからの時代の公共空間のあり方～コロナ禍におけるニューヨークの都市と公園の変化から考える～」と題し、ニューヨークとつなぎ、島田智里さん（ニューヨーク市公園局）にお話いただきました。

前半は、ニューヨーク市の長期環境政策などにおける公園整備の位置づけや都市における緑の状況調査における GIS や市民ボランティアによる街路樹 1 本 1 本のデータの可視化や一般公開による市民とのつながりづくりなどを紹介いただきました。

後半では、今回のコロナウイルス感染拡大を受け、ロックダウンまで行われたニューヨークでの公園の使われ方として、行政によるマスク提供や緊急病院の設置、感染ピーク時も変わらず市民の利用が多いといった状況を実際の様子を交えてお話いただきました。

在宅勤務の増加、学校や施設の閉鎖など、働き方や暮らしの変化もあるなか、徒歩や自転車圏にある公園が、運動の機会や癒し、自然環境の提供を担っていることも紹介され、これからの都市や公園のあり方、まちの回復は、教育や福祉、犯罪やホームレスなどの社会課題、芸術やエンターテイメントなど包括的に考える必要があるのでは、と話されました。

なお、ニューヨークとの時差は 13 時間。個人的には、慣れ親しんだ「お会いする」以外に時空を超えた場へのハードルが下がったのもコロナ禍での変化（効果）の一つともいえます。

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

26 回　2020 年 10 月 7 日

関西都心のオフィスセンターの動向と都市構造の変化－過去と今後を展望する－
大島コンサルティング・オフィス　大島洋一氏

第 26 回（10 月 7 日開催）は、大島洋一氏に昨今のオフィス需給の動向について、お話いただきました。大島氏は、実務の傍ら、長年のオフィス移転調査から都心の変容と需給について、空間的・時間的に分析し、都市経営の観点から都市の供給（開発）と需要（都心のクラスター化）を研究されています。

第一部（2008 年～ 2013 年：低迷期）では、リーマン・ショック後 10 年のオフィス供給（開発）と需要をオフィス移転から分析して 2020 年頃のオフィス不況を予測し、関西のオフィス特性、東京との市場比較を踏まえ、大阪都心でのオフィスセンター（クラスター）の変容について説明されました。

第二部（2013 年～ 2018 年：活性期）では、都市と経済の変容のメカニズム及び今後の開発のあり方について提言いただき、オフィス移転件数と面積は、御堂筋線沿いに梅田に向かって増加していることが印象的でした。最後に想定外のコロナ禍における働き方とオフィスのあり方について、現時点の考察をお示しいただきました。リモートワークを積極的に活用していく企業が増えていく中、これからのオフィスのあり方について、注目していきたいです。（杉本健太朗）

27 回　2020 年 10 月 21 日

人口減少で都市計画がどう変わるか
東京都立大学　都市環境学部教授　饗庭伸氏

第 27 回は、饗庭伸教授をお招きし、著書『都市をたたむ』でも論じられた、都市の「スポンジ化」について触れながら、「人口減少で都市計画がどう変わるか」というテーマでお話しいただきました。

人口減少が進む中、「過疎」を敵ではなく、どのように捉えていくか。人口、世帯、住宅数の減少がいつか安定状態に入ると仮定したとき、そこに向けて都市計画のゴール・ルートを設定できないか。現在行われているエリマネ等の仕組みを維持していくために、今後法律と制度のバランスをいかに取っていくか。等、人口減少下で起こり得る事象と対応策について、様々な切り口からお話しいただきました。

人口減少と聞くと、どうしてもそれに伴う悪い影響ばかりに気を取られてしまいますが、丁寧に見ていくと、絶対に避けられない「スポンジ化」のような問題もあれば、空き家・空き地のように、目的を実現するための手段として、ポジティブに捉えられそうなものも存在します。本当に目を向けるべき点はどこにあるのかを改めて考える機会となりました。（小島みのり）

Letters Arpak
レターズアルパック

［レターズアルパック］224号　2020年11月発行　（株）地域計画建築研究所　https://www.arpak.co.jp

まちかど

「たんば」で暮らし・働く

戸田幸典：
地域再生デザイングループ

「たんばで‥」とお伝えすると、「京都の北部ですね」「篠山ですか」などとそれぞれのイメージが返ってくることがしばしば。

丹波市の自宅近くから見る風景

古くは「たには」とも言われた「丹波」という言葉の由来は諸説ありますが、現在、地名として使われる京都府、兵庫県及び大阪府の一部を指す「丹波」地域はご存知のとおり律令国の1つであった「丹波国」に由来しています。「丹波」でイメージする場所が人それぞれであることは当然です。

「丹波」という言葉は丹波栗・丹波松茸・丹波黒豆などブランド名として認知されていることから、その名称使用で議論となったことも。例えば、市町村合併ではどの自治体が名称に入れるかで話題になり、最近では、篠山市が丹波篠山市に改名したこともニュースになりました。

そのような状況ですから、最近では「丹波市」とお伝えするように気をつけているのですが、それでも「どこ？」という反応が返ってくるのが、この秋の定番のやりとりでした。

と言うのも、この秋、20年間暮らし働いてきた京都市を離れ、家族4人で「丹波市」に嫁ターン（妻の実家のある地区へUターン）しました。2年ほど前の紙面でも触れた2021年を目標としていた丹波市への転居・仕事・拠点づくり。コロナ禍によって、テレワークの急激な普及と受容、暮らすまちや子どもたちを取り巻く環境の変化、いくつかの業務に従事してきた丹波市やその周辺でのご縁など様々な機会が重なり、予定より1年ほど早く移動することになりました。

「空気」「山」「風景」「水」、そして「人」。丹波市に惹かれた理由はいろいろありますが、その1つひとつに日々触れることができる暮らし、家族とともに過ごす時間の豊かさ、そして新たな働き方の可能性を実感する日々です。

この季節、「丹波」の道沿いでは畑から収穫したばかりの黒枝豆の販売風景を多く見かけます。転居してすぐの週末には、知人の農家が営む畑で、京都の友人家族と黒枝豆の収穫、葉・枝落とし・鞘取りと、早速、秋の丹波の自然を自ら感じ、楽しむ時間も持ちました。

丹波市での仕事の拠点はアルパックが今年度末まで運営する丹波市市民活動支援センター、自宅、そしてコワーキングスペース。これまでの方法やルールではうまくいかないこともありますが、新たな働き方にチャレンジしています。

時を同じくして、丹波市を中心とした地域自治によるまちづくりを支援する法人も設立しました。当面はアルパック所員として携わる京都や大阪等の地域にも通いながらの経営になります。

暮らしと仕事の次なるステージは丹波市から。複数の組織で、丹波市という地方での暮らしとテレワークを通じて、持続可能な地域、未来、働き方をつくることを目指します。

表紙写真：広沢公園で遊ぶ親子／京都市右京区（撮影　嶋崎雅嘉）

「レターズ アルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。

arpak
アルパック（株）地域計画建築研究所
Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp　E-mail:info@arpak.co.jp

本社・
京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82　TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764
大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F　TEL(06)6205-3600　FAX(06)6205-3601
名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F　TEL(052)462-1030　FAX(052)462-1061
東京事務所 〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F　TEL(03)5244-5132　FAX(03)6273-7715
九州事務所 〒810-0802（株）よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F　TEL(092)283-2121　FAX(092)283-2128
滋賀営業所 〒527-0012 東近江市八日市本町9-14　TEL(0748)36-2065　FAX(0748)36-2168
ホーチミン（ベトナム） 0908.CJ Building.2-4-6 Le Thanh Ton street. District 1 HCMC.Vietnam　TEL+84(028)6255-6732

再エネ100宣言 RE Action
この用紙は「びわ湖の森を元気にする」kikitoペーパーを使用しています。